ゼカリヤ書

第一章

一　ダリヨスの二年八月ヱホバの言イドの子ベレキヤの子なる預言者ゼカリヤに臨めり云く　二　ヱホバいたく汝らの父等を怒りたまへり　三　萬軍のヱホバかく言ふと汝かれらに告よ萬軍のヱホバ言ふ　四　汝らの父等のごとくならざれ前の預言者等かれらに向ひて呼はりて言り萬軍のヱホバかく言たまふ請ふ汝らその惡き道を離れその惡き行を棄てゝ歸れと然るに彼等は聽ず耳を我に傾けざりきヱホバこれを言ふ　五　汝らの父等は何處にありや預言者たち永遠に生んや　六　然ながら我僕なる預言者等に我が命じたる吾言とわが法度とは汝らの父等に追及たるに非ずや然ゆゑに彼らかへりて言り萬軍のヱホバ我らの道に循ひ我らの行に循ひて我らに爲んと思ひたまひし事を我らに爲たまへりと

七　ダリヨスの二年十一月すなはちセバテといふ月の二十四日にヱホバの言イドの子ベレキヤの子なる預言者ゼカリヤに臨めり云く　八　我夜觀しに一箇の人赤馬に乘て谷の裏なる烏拈樹の中に立ちその後に赤馬　駁馬　白馬をる　九　我わが主よ是等は何ぞやと問けるに我と語ふ天の使われにむかひて是等の何なるをわれ汝に示さんと言り　一〇　烏拈樹の中に立る人答へて言けるは是等は地上を遍く歩かしめんとてヱホバの遣したまひし者なりと　一一　彼ら答へて烏拈樹の中に立るヱホバの使に言けるは我ら地上を行めぐり觀しに全地は穩にして安し　一二　ヱホバの使こたへて言ふ萬軍のヱホバよ汝いつまでエルサレムとユダの邑々を恤みたまはざるか汝はこれを怒りたまひてすでに七十年になりぬと　一三　ヱホバ我と語ふ天の使に嘉言慰言をもて答へたまへり　一四　かくて

イ 詩四・二四 基一・一　ヘ 耶二五・五、三五・　雅四・八　ホ 賽三一・六　耶三・　一四・一　チ 書五・一三 默六・四　ル 詩一〇三・二〇、
ロ 詩五・一　太二三・　二代下三六・一五、　一五 米七・一九 馬　一二、一八・一一　ヘ 賽五五・一　リ 亞六・二　七　ヲ 耶二五・一一、一三
三五　三・七 路一五・二〇　一六　結一八・三〇　何　卜 哀一・一八、二・一七　ヌ 來一・一四　ヲ 詩一〇二・一三 默　俱九・二　亞七・五

ヨ耳二・一八 亞八・二 ソ亞二・一、二 五・三 牛耶三一・二七 結 ク詩四八・二〇、五二
タ詩四七・六 ツ詩五一・三 ラ詩七五・四、五 三六・一〇、一一 ・二一 耶一・二四、
レ詩一二・一、五四・ ネ詩一四・一 ム結四〇・三 ノ詩二六・一 亞九・八 五〇・八、五一・六、
八 亞二・一〇、八 ナ詩四・一、四、七、 ウ默一一・一、二一・ オ詩六〇・一九 四五 默
・三 一五、一六 二一・二三 十申二八・六四 結

我と語ふ天の使我に言けるは汝呼はりて言へ萬軍のヱホバかく言たまふ我ヱルサレムのためシオンのために甚だ
一五 しく心を熱して嫉妬おもひ 一五 安居せる國々の民を太く怒る其は我すこしく怒りしに彼ら力を出して之に害を加
一六 へたればなり 一六 ヱホバかく言ふ是故に我憐憫をもてヱルサレムに歸る萬軍のヱホバのたまふ我室その中に建ら
一七 れ量繩ヱルサレムに張られん 一七 汝また呼はりて言へ萬軍のヱホバかく宣ふ我邑々には再び嘉物あふれんヱホバ
ふたゝびシオンを慰め再びヱルサレムを簡びたまふべしと
一八 一八 かくて我目を擧て觀しに四の角ありければ 一九 我に語ふ天の使に是等は何なるやと問しに彼われに答へけ
一九 二〇 るは是等はユダ、イスラエルおよびヱルサレムを散したる角なりと 二〇 時にヱホバ四箇の鍛冶を我に見し給へり
二一 二一 我是等は何を爲んとて來れるやと問しに斯こたへ給へり是等の角はユダを散して人にその頭を擧しめざりし
者なるが今この四箇の者來りて之を威しかのユダの地にむかひて角を擧て之を散せし諸國の角を擲たんとす

第二章

一 一 茲に我目を擧て觀しに一箇の人量繩を手に執居ければ 二 汝は何處へ往くやと問しにヱルサレム
二 三 を量りてその廣と長の幾何なるを觀んとすと我に答ふ 三 時に我に語ふ天の使出行たりしが又一箇
三 四 の天の使出きたりて之に會ひ 四 之に言けるは走ゆきてこの少き人に告て言へヱルサレムはその中に人と畜と
四 五 饒なるによりて野原のごとくに廣く亘るべし 五 ヱホバ言たまふ我その四周にて火の垣となりその中にて榮光と
五 六 ならん 六 ヱホバいひたまふ來れ來れ北の地より逃きたれ我なんぢらを四方の天風のごとくに行わたらしむればなり

七 ヱホバこれを言ふ　七 來れバビロンの女子とともに居るシオンよ遁れ來れ　八 萬軍のヱホバかく言たまふヱホバ
九 汝等を擄へゆきし國々へ榮光のために我儕を遣したまふ汝らを打つ者は彼の目の珠を打なればなり　九 即ち我
手をかれらの上に搖ん彼らは己に事へし者の俘虜となるべし汝らは萬軍のヱホバの我を遣したまへるなるを
一〇 知ん　一〇 ヱホバ言たまふシオンの女子よ喜び樂め我きたりて汝の中に住ばなり　一一 その日には許多の民ヱホバ
一二 に附て我民とならん我なんぢの中に住べし汝は萬軍のヱホバの我を遣したまへるなるを知ん　一三 ヱホバ聖地の中
一三 にてユダを取て己の分となし再びヱルサレムを簡びたまふべし　一三 ヱホバ起てその聖住所よりいでたまへば凡そ
血肉ある者ヱホバの前に肅然たれ

第三章

一 彼祭司の長ヨシユアがヱホバの使の前に立ちサタンのその右に立てこれに敵しをるを我に見す
二 ヱホバ、サタンに言たまひけるはサタンよヱホバ汝をせむべし即ちヱルサレムを簡びしヱホバ汝
三 をいましむ是は火の中より取いだしたる燃柴ならずやと　三 ヨシユア汚なき衣服を衣て使の前に立をりしが
四 ヱホバ己の前に立る者等に告て汚なき衣服を之に脱せよと宣ひまたヨシユアに向ひて觀よ我なんぢの罪を汝の
五 身より取のぞけり汝に美服を衣すべしと宣へり　五 我また潔き冠冕をその首に冠らせよと言り是において潔き
六 冠冕をその首に冠らせ衣服をこれに衣すヱホバの使は立をる
六 ヱホバの使證してヨシユアに言ふ　七 萬軍のヱホバかく言たまふ汝もし我道を歩みわが職守を守らば我
七 家を司どり我庭を守ることを得ん我また此に立る者等の中に往來する路を汝に與ふべし　八 祭司の長ヨシユアよ
八

イ 默一八・四　ロ 申三二・一〇　詩一七・八 撒後一・六　ハ 箴一一・一五、一九　二・一六　ホ 賽一二・六、五四・一　番三・一四　ヘ 利二六・一二　結三七・二七 亞八・三　約一・一四 哥後六・一六　ト 亞三・一〇　チ 賽二・二、三、四九・二二、六〇・三 亞八・二二、二三　リ 出一二・四九　ヌ 結三三・三三 亞二・九　ル 申三二・九　ヲ 亞一・一七　ワ 詩六八・五 賽五七・一五 申二六・一五　カ 哈二・二〇 番一・七　ヨ 基一・二　タ 詩一〇九・六 默一一・一〇　レ 猶九・五　ソ 亞一・一七 羅八・三　ツ 歴四・一一 羅一一　ネ 賽六四・六　ナ 賽六一・一〇 路一五・二二 默一九　ム 利八・三五 王上二・三 結四四・一六　ラ 出二九・六 亞六・一一　ウ 申一七・九 馬二・七　中 亞四・一四、六・五

ノ詩七一・七　賽八・五三・一一　結三四　ヤ詩一一八・二二　賽フ亞二・一一・一二
一八、二〇・三　結二八・二六　コ王上四・二五　賽サ出二五・三七　默四
一二・一一、二四・ク賽四・二、一一・一　マ亞四・一〇　默五・六　三六・一六　米四・四　ミ刺三・一一、一三
二四　耶二三・五、三三・　ケ耶三一・三四、五〇　エ亞二・三　キ亞四・一一、一二　默　シ詩一一八・二二
オ賽四二・一、四九・　一五　亞六・一二　路　・二〇　米七・一八、　テ但八・一八　一一・四　ヱ刺三・一〇
三、五、五二・一三、　一・七八　一九　亞一三・一　ア出二五・三一　默一　ユ何一・七　ヒ刺六・一五

請ふ汝と汝の前に坐する汝の同僚とともに聽べし彼らは即ち前表となるべき人なり我かならず我僕たる枝を來らすべし　九　ヨシユアの前に我が立るところの石を視よ此一箇の石の上に七箇の目あり我自らその彫刻をなす萬軍のヱホバこれを言ふなり我この地の罪を一日の内に除くべし　一〇　萬軍のヱホバ言たまふ其日には汝等おのおの互に相招きて葡萄の樹の下無花果の樹の下にあらん

第四章

一　我に語へる天の使また來りて我を呼醒せり我は睡れる人の呼醒されしごとくなりき　二　彼我にむかひて汝何を見るやと言ければ我いへり我觀に惣金の燈臺一箇ありてその頂に油を容る器ありまた燈臺の上に七箇の燈盞ありその燈盞は燈臺の頂にありて之に各七本づつの管あり　三　また燈臺の側に橄欖の樹二本ありて一は油を容る器の右にあり一はその左にあり　四　我答へて我と語ふ天の使に問言けるは我主よ是等は何ぞやと　五　我と語ふ天の使我に答へて汝是等の何なるを知ざるかと言しにより我主よ知ずとわれ言り　六　彼また答へて我に言けるはゼルバベルにヱホバの告たまふ言は是のごとし萬軍のヱホバ宣ふ是は權勢に由らず能力に由らず我靈に由るなり　七　ゼルバベルの前にあたれる大山よ汝は何者ぞ汝は平地とならん彼は恩惠あれ之に恩惠あれと呼はる聲をたてゝ頭石を曳いださん　八　ヱホバの言われに臨めり云く　九　ゼルバベルの手この室の石礎を置たり彼の手これを成終ん汝しらん萬軍のヱホバ我を汝等に遣したまひしと　一〇　誰か小き事の日を藐視むる者ぞ夫の七の者は遍く全地に往來するヱホバの目なり準繩のゼルバベルの手にあるを見て喜ばん　一一　我また彼に問て燈臺の右左にある此二本の橄欖の樹は何なるやと言ひ　一二　重ねてまた彼に問て此二本の金

一三 の管によりて金の油をその中より斟ぎ出す二枝の橄欖は何ぞやと言しに　一三 彼われに答へて汝是等の何なるを知
一四 ざるかと言ければ我主よ知ずと言けるに　一四 彼言らく是等は油の二箇の子にして全地の主の前に立つ者なり

第五章

一 我また目を擧て觀しに卷物の飛あり　二 彼われに汝何を見るやと言ければ我言ふ我卷物の飛ぶを
二 見る其長は二十キュビトその寬は十キュビト　三 彼またわれに言けるは是は全地の表面を往めぐる
三 呪詛の言なり凡て竊む者は卷物のこの面に照して除かれ凡て誓ふ者は卷物の彼の面に照して除かるべし　四 萬軍
四 のヱホバのたまふ我これを出せり是は竊盜者の家に入りまた我名を指て僞り誓ふ者の家に入てその家の中に宿り
その木と石とを並せて盡く之を燒べしと

五 我に語へる天の使進み來りて我に言けるは請ふ目を擧てこの出きたれる物の何なるを見よ　六 これは何な
六 るやと我言ければ彼言ふ此出來れる者はエバ升なり又言ふ全地において彼等の形狀は是のごとしと　七 かくて鉛
七 の圓き蓋を取あぐれば一人の婦人エバ升の中に坐し居る　八 彼是は罪惡なりと言てその婦人をエバ升の中に投い
八 れ鉛の錘をその升の口に投かぶらせたり　九 我また目を擧て觀しに婦人二人出きたれり之に鶴の翼のごとき翼あ
九 りてその翼風を含む彼等そのエバ升を天地の間に持擧ぐ　一〇 我すなはち我に語ふ天の使にむかひて彼等エバ升を
一〇 何處へ携へゆくなるやと言けるに　一一 彼我に言ふシナルの地にて之がために家を建んとてなり是は彼處に置られ
一一 てその臺の上に立ん

第六章

一 我また目を擧て觀しに四輛の車二の山の間より出きたれりその山は銅の山なり　二 第一の車
二 には赤馬を着け第二の車には黑馬を着け　三 第三の車には白馬を着け第四の車には白點なる強馬を
三

イ 默一一・四　ロ 亞三・七　路一・一九　ハ 書三・一一、一三　ホ 馬四・六　ヘ 利一九・一二　亞八・一七　ト 利一四・四五　チ 創一〇・一〇　リ 耶二九・五、二八　ヌ 亞一・八　ル 默六・五　ヲ 默六・二

ワ亞五・一〇　カ詩一〇四・四　來一・七、一四　ヨ王上二二・一九　但七・一〇　亞四・一四　路一・一九　タ耶一・一四　レ創一三・一七　亞一・一〇　ツ出二八・三六、二九　ネ路一・七八　約一・四五　ナ亞三・八　ラ亞四・九　太一六・一八　弗二・二〇、二一、二二　來三・三　ム箴二二・二四　ウ詩一一〇・四　來三・一〇　弗二・一三、一九　ヤ申一七・九、一〇、一一、三三・一〇　ク出一二・一四　可　オ亞二・九、四・九　ク毋前一三・一二　亞　マ耶五二・一二　亞八・一九　ノ箴五七・一九、六〇　ヤ亞三・八　ム箴二二・二四

四 着く　四 我すなはち我に語ふ天の使に問て我主よ是等は何なるやと言けるに　五 天の使こたへて我に言ふ是は四
五 の天風にして全地の主の前より罷り出たる者なり　六 黑馬は北の地をさして進み行き白馬その後に從ふ又白點馬
六 は南の地をさして進みゆき　七 強馬は進み出て地を徧く行めぐらんとす彼なんぢら往き地を徧くめぐれと言たま
七 ひければ則ち地を行めぐれり　八 彼われを呼て我に告て言ふこの北の地に往る者等は北の地にて我靈を安んず
八 九 ヱホバの言われに臨めり曰く　一〇 汝かの囚虜人の中の者ヘルダイ、トビヤおよびヱダヤより取ことをせよ
九 一〇 即ちその日に汝かれらがバビロンより歸りて宿りをるゼパニヤの子ヨシヤの家に到り　一一 金銀を取て冠冕を造り
一一 ヨザダクの子なる祭司の長ヨシユアの首にこれを冠らせ　一二 彼に語りて言べし萬軍のヱホバ斯言たまふ視よ人あ
一二 りその名を枝といふ彼おのれの處より生いでてヱホバの宮を建ん　一三 即ち彼者ヱホバの宮を建て尊榮を帶びその
一三 位に坐して政事を施しその位にありて祭司とならん此二の者の間に平和の計議あるべし　一四 偖またその冠冕は
一四 ヘレム、トビヤ、ヱダヤおよびゼパニヤの子ヘンの記念のために之をヱホバの殿に納むべし　一五 遠き處の者等來り
一五 てヱホバの殿を建ん而して汝らは萬軍のヱホバの我を遣したまひしなるを知にいたらん汝らもし汝らの神ヱホバ
の聲に聽したがはゞ是のごとくなるべし

第七章

一 ダリヨス王の四年の九月すなはちキスリウといふ月の四日にヱホバの言ゼカリヤに臨めり　二 ベ
一 テルかの時シヤレゼル、レゲンメレクおよびその從者を遣してヱホバを和めさせ　三 かつ萬軍のヱ
二 ホバの室にをる祭司に問し且預言者に問しめて言けらく我今まで年久しく爲きたりしごとく尚五月をもて哭き
三

四 かつ齋戒すべきやと　四 こゝにおいて萬軍のヱホバの言われに臨めり云く　五 國の諸民および祭司に告て言へ汝
五 らは七十年のあひだ五月と七月とに斷食しかつ哀哭せしがその斷食せし時果して我にむかひて斷食せしや　六 汝
六 ら食ひかつ飲は全く己のために食ひ己のために飲ならずや　七 在昔ヱルサレムおよび周圍の邑々人の住ふありて
七 平安なりし時南の地および平野にも人の住ひをりし時に已往の預言者によりてヱホバの宣ひたりし言を汝ら知ざ
るや

八 ヱホバの言ゼカリヤに臨めり云く　九 萬軍のヱホバかく宣へり云く正義き審判を行ひ互に相愛しみ相憐め
八 一〇 寡婦孤兒旅客および貧者を虐ぐるなかれ人を害せんと心に圖る勿れと　一一 然るに彼等は肯て耳を傾けず
九 一〇 一一 脊を向け耳を鈍くして聽ず　一二 且その心を金剛石のごとくし萬軍のヱホバがその御靈をもて已往の預言者に由て
一一 一二 傳へたまひし律法と言詞に聽したがはざりき是をもて大なる怒萬軍のヱホバより出て臨めり　一三 彼かく呼はりた
一三 れども彼等聽ざりき其ごとく彼ら呼はるとも我聽じ萬軍のヱホバこれを言ふ　一四 我かれらをその識ざる諸の國
一四 に吹散すべし其後にてこの地は荒て往來する者なきに至らん彼等かく美しき國を荒地となす

第八章

一 萬軍のヱホバかく言われに臨めり曰く　二 萬軍のヱホバかく言たまふ我シオンのために甚だしく
一 二 心を熱して妬く思ひ大なる忿怒を起して之がために妬く思ふ　三 ヱホバかく言たまふ今我シオンに
三 歸れり我ヱルサレムの中に住んヱルサレムは誠實ある邑と稱へられ萬軍のヱホバの山は聖山と稱へらるべし
四 萬軍のヱホバかく言たまふヱルサレムの街衢には再び老たる男老たる女坐せん皆年高くして各々杖を手に持べ

イ 亞一・二二　ロ 耶四一・一　亞八・一九　ハ 箴五八・五　ニ 羅一四・六　ホ 耶一七・二六　ヘ 箴五八・六、七　耶七・二三　米六・八　亞八・一六　太二三・二三　ト 出二二・二二、二三　中二四・一七　箴一　ヌ 徒七・五七　ル 結一一・一九、三六　・二六　チ 詩三六・四　米二・一　亞八・一七　リ 尼九・二九　耶七・二四　何四・一六　ヲ 尼九・二九、三〇　ワ 代下三六・一六　但九・一一　カ 歳一・二四—二八　ヨ 申二八・三三　タ 申四・二七、二八　ネ 亞一・一六　ナ 亞二・一〇　ツ 翁一・二　亞一・一四　レ 利二六・二二　ソ 但八・九　ム 箴二・二、三　ウ 耶三一・二三　キ 撰前二・三一　箴六五・二〇、二二　哀二・二〇、五・一一　ラ 箴一・二一、二六　箴三・四　箴一・一五　耶一一・一四・一二　亞二・六　・二一、一四・一二

ノ創一八・一四 路一・三七、一八・二七 羅四・二一 オ賽一一・一一、一二、四三・五、六 結三七 ・二一 廢九・一四、・一、三三 亞一三・ 二・二三 基二・一九 ・二一 基二・四 亞八・一三 サ詩六七・六 キ基一・一〇 ユ耶四二・一八 ヌ創一二・二 ・二四、二五 番三・二〇 基二・一九 ミ亞八・九 シ耶三一・二八 一一、一二 箴一九 ヱ代下三六・一六 亞一・六 ヒ亞七・九、八・一九 弗四・二五 モ箴三・二九 亞七・ 一〇 セ亞五・三、四

五 し

五 またその邑の街衢には男の兒女の兒滿て街衢に遊び戲れん

六 萬軍のヱホバかく言たまふこの事その日には此民の遺餘者の目に奇といふとも我目に何の奇きことと有んや萬軍のヱホバこれを言ふ

七 萬軍のヱホバかく言たまふ視よ我わが民を日の出る國より日の入る國より救ひ出し

八 かれらを携へ來りてヱルサレムの中に住しめん彼らは我民となり我は彼らの神となりて共に誠實と正義に居ん

九 萬軍のヱホバかく言たまふ汝ら萬軍のヱホバの室なる殿を建んとて其基礎を置たる日に起りし預言者等の口の言詞を今日聞く者よ汝らの腕を強くせよ

一〇 此日の先には人も工の價を得ず獸畜も工の價を得ず出者も入者も仇の故をもて安然ならざりき即ちわれ人々をして互に相攻しめたり

一一 然れども今は我此民の遺餘者に對すること曩の日の如くならずと萬軍のヱホバ言たまふ

一二 即ち平安の種子あるべし葡萄の樹は果を結び地は產物を出し天は露を與へん我この民の遺餘者にこれを盡く獲さすべし

一三 ユダの家およびイスラエルの家よ汝らが國々の中に呪詛となりしごとく此度は我なんぢらを救ふて祝言とならしめん懼るゝ勿れ汝らの腕を強くせよ

一四 萬軍のヱホバかく言たまふ在昔汝らの先祖我を怒らせし時に我これに災禍を降さんと思ひて之を悔ざりき

一五 是のごとく我また今日ヱルサレムとユダの家に福祉を降さんと思ふ汝ら懼るゝ勿れ

一六 萬軍のヱホバこれを言ふ

一六 汝らの爲べき事は是なり汝ら各々たがひに眞實を言べし又汝等の門にて審判する時は眞實を執て平和の審判を爲べし

一七 汝等すべて人の災害を心に圖る勿れ僞の誓を好む勿れ是等はみな我が惡む者なりとヱホバ言たまふ

一八　一八　萬軍のヱホバの言われに臨めり云く　一九　萬軍のヱホバかく言たまふ四月の斷食五月の斷食七月の斷食十月
二〇　の斷食かへつてユダの家の宴樂となり欣喜となり佳節となるべし惟なんぢら眞實と平和を愛すべし　二〇　萬軍のヱ
二一　ホバかく言たまふ國々の民および衆多の邑の居民來り就ん　二一　即ちこの邑の居民往てかの邑の者に向ひ我儕すみ
二二　やかに往てヱホバを和め萬軍のヱホバを求めんと言んに我も往べしと答へん　二二　衆多の民強き國民ヱルサレムに
二三　來りて萬軍のヱホバを求めヱホバを和めん　二三　萬軍のヱホバかく言たまふ其日には諸の國語の民十人にてユダ
ヤ人一箇の裾を拉へん即ち之を拉へて言ん我ら汝らと與に往べし其は我ら神の汝らと偕にいますを聞たればなり

第九章

一　ヱホバの言詞の重負ハデラクの地に臨むダマスコはその止る所なりヱホバ世の人を眷みイヌラエ
ルの一切の支派を眷みたまへばなり　二　之に界するハマテも然りツロ、シドンも亦はなはだ伶俐け
れば同じく然るべし　三　ツロは自己のために城廓を構へ銀を塵のごとくに積み金を街衢の土のごとくに積めり
四　視よ主これを攻取り海にて之が力を打ぼろぼしたまふべし是は火にて焚うせん　五　アシケロンこれを見て懼れ
ガザもこれを見て太く慄ふエクロンもその望む所の者辱しめらるゝに因て亦然りガザには王絶えアシケロンには
六　住者なきに至らん　六　アシドドにはまた雜種の民すまん我ペリシテ人が誇る所の者を絶べし　七　我これが口より
血を取除き之が齒の間より憎むべき物を取除かん是も遺りて我儕の神に歸しユダの牧伯のごとくに成べしまたエ
クロンはヱブス人のごとくになるべし　八　我わが家のために陣を張て敵軍に當り之をして往來することを無らしめん虐遇者かさねて逼ることを無るべし

イ 耶五二・六、七　ロ 耶五二・一二、一三　亞七・三、五　ハ 王下二五・二五　耶四一・二、二　ニ 耶五二・四　ホ 帖八・一七　ヘ 亞八・一六・一〇　ト 賽二・三　チ 亞七・二　リ 賽六〇・三、六六・二三　ヌ 賽三・六、四・一　ル 哥前一四・二五　ヲ 耶二三・三三　ワ 歷一・三　カ 代下二〇・一二　詩一四五・一五　ヨ 耶四九・二三　タ 賽二三・結二六、二七、二八・歷一・二・九　レ 王上一七・九　結二八・二一　ソ 結二八・三　ツ 伯二七・一六　結二八・四、五　ネ 賽二三・一　阿二〇　ナ 結二六・一七　ラ 耶四七・一、五　番二・四　ム 歷一・八　ウ 詩三四・七　亞二・五　キ 賽六〇・一八　結二八・二四

ノ出三・七　路一九・三八　約一　マ弗二・一四、一七　一四、六一・一　サ賽二一・一　ヌ賽一一・一二
オ箴六二・一一　亞二・四九　ケ詩七二・八　エ賽四九・九　キ利四・一八、二五　中　ミ詩三一・一九　ヒ申一一・一四　イ伯一三・四
・一〇　太二一・五　ヤ何一・七、二・一八　フ出二四・八　來一〇　テ箴六一・七　ヨ賽六二・三　馬三・　シ耳三・一八　ヒ申一一・一四　ロ結三四・五
約一二・一五　米五・一〇　基二・　・二九、一三・二〇　ア詩一八・一四、七七　ヨ賽四二・七、五一・　一四　モ耶一四・二二　ハ結三四・一七
ク耶二三・五、三〇・九　二二　・一七、一四四・六　ヨ伯二九・二三　耳二　セ耶一〇・一三　ス耶一〇・八　哈二・　・二三　一八　士一七・五

我いま我目をもて親ら見ればなり

九　シオンの女よ大に喜べエルサレムの女よ呼はれ視よ汝の王汝に來る彼は正義して拯救を賜り柔和にして驢馬に乘る即ち牝驢馬の子なる駒に乘るなり

一〇　我エフライムより車を絶ちエルサレムより馬を絶ん戰爭弓も絶るべし彼國々の民に平和を諭さん其政治は海より海に及び河より地の極におよぶべし

一一　汝についてはまた汝の契約の血のために我かの水なき坑より汝の被俘人を放ち出さん

一二　望を懷く被俘人よ汝等城に歸れ我今日もなほ告て言ふ我かならず倍して汝等に賚ふべし

一三　我ユダを張て弓となしエフライムを矢となして之につがへんシオンよ我汝の人々を振起してギリシヤの人々を攻しめ汝をして大丈夫の劍のごとくならしむべし

一四　ヨホバこれが上に顯れてその箭を電光のごとくに射いだしたまはん主ヨホバ喇叭を吹ならし南の暴風に乘て出來まさん

一五　萬軍のヨホバ彼らを護りたまはん彼等は食ふことを爲し投石器の石を踏つけん彼等は飲ことを爲し酒に醉るごとくに聲を擧ん其これに盈さるゝことは血を盛る鉢のごとく祭壇の隅のごとくなるべし

一六　彼らの神ヨホバ當日に彼らを救ひその民を羊のごとくに救ひたまはん彼等は冠冕の玉のごとくになりて其地に輝くべし

一七　その福祉は如何計ぞや其美麗は如何計ぞや穀物は童男を長ぜしめ新酒は童女を長ぜしむ

第一〇章

一　汝ら春の雨の時に雨をヨホバに乞へヨホバ電光を造り大雨を人々に賜ひ田野において草蔬を各々に賜ふべし

二　夫テラピムは空虛き事を言ひト筮師はその見る所眞實ならずして虛僞の夢を語る其慰むる所は徒然なり是をもて民は羊のごとくに迷ひ牧者なきに因て惱む

三　我牧者にむかひて怒を發す我牡山羊

四 を罰せん萬軍のヱホバその群なるユダの家を顧み之をしてその美しき軍馬のごとくならしめたまふ

五 り出で釘かれより出で軍弓かれより出で宰たる者みな齊く彼より出ん

六 の泥の中に敵を蹂躙らんヱホバかれらとともに在せば彼ら戰はん馬に騎れる者等すなはち媿を抱くべし

七 ユダの家を強くしヨセフの家を救はん我かれらを恤むが故に彼らをして歸り住しめん彼らは我に棄られし事なきが如くなるべし我は彼らの神ヱホバなり我かれらに聽べし

八 エフライム人は勇士に等しくして酒を飲たるごとく心に歡ばん其子等は見て喜びヱホバに因て心に樂まん

九 我かれらに向ひて嘯きて之を集めん其は我これを贖ひたればなり彼等は昔殖增たるごとくに殖增ん

一〇 我かれらをエジプトの國より携へかへりアッスリヤより彼等を集めギレアデの地およびレバノンに彼らを携へゆかんその居處も無きほどなるべし

一一 彼艱難の海を通り海の浪を擊破りたまふナイルの淵は盡く涸るアッスリヤの傲慢は卑くせられエジプトの杖は移り去ん

一二 我彼らをしてヱホバに由て強くならしめん彼等はヱホバの名をもて歩まんヱホバこれを言たまふ

第一一章

一 レバノンよ汝の門を啓き火をして汝の香柏を焚しめよ

二 松よ叫べ香柏は倒れ威嚴樹はそこなはれたりバシャンの橡よ叫べ高らかなる林は倒れたり

三 牧者の叫ぶ聲あり其榮そこなはれたればなり猛き獅子の吼る聲ありヨルダンの叢そこなはれたればなり

イ 路一・六八　ロ 歌一・九　ハ 民二四・一七　一四・三八　賽一九・二三　ニ 賽二二・二三　ホ 詩一八・四二　ヘ 何一・七　ト 耶三・一八　結三七　チ 亞一三・九　リ 詩一〇四・一五　亞九・一五　ヌ 賽五・二六　ル 賽四九・一九　結三六・三七　ヲ 何二・二三　ワ 申三〇・一　カ 賽一一・一、一六　何一一・一一　ヨ 賽四九・二〇　タ 賽一一・一五、一六　レ 賽一四・二五　ソ 結三〇・一三　ツ 米四・五　ネ 亞一〇・一〇　ナ 賽三二・一九

ム耶二・三、五〇・七　キ亞一一・四　オ何五・七　ヤ番三・一二　亞一一　ヨ耶二三・一　結三四　エ賽四二・五、四四・　テ民一六・二二　傳
ウ申二九・一九　何　ノ番三・一二　太一一　ク耶一五・二、四三・　マ太二六・一五　出　ケ太二七・九、一〇　ヲ出三四・二、三、四　・二　約一〇・一二、　一二・七　賽五七・
一二・八　一一　・七　フ出　一三　一八、四八・一三　一六　來一二・九

四　我神ヱホバかく言たまふ宰らるべき羊を牧へ　五　之を買ふ者は之を宰るとも罪なし之を賣る者は言ふ我富を得ればヱホバを祝すべしと其牧者もこれを惜まざるなり　六　ヱホバ言たまふ我かさねて地の居民を惜まじ視よ我人を各々その鄰人の手に付しその王の手に付さん彼ら地を荒すべし我これを彼らの手より救ひ出さじ　七　我すなはち其宰らるべき羊を牧り是は最も憫然なる羊なり我みづから二本の杖を取り一を恩と名け一を結と名けてその羊を牧り　八　我一月に牧者三人を絶り我心に彼らを厭ひしが彼等も心に我を惡めり　九　我いへり我は汝らを飼はじ死る者は死に絶るゝ者は絶れ遺る者は互にその肉を食ひあふべし　一〇　我恩といふ杖を取て之を折れり是諸〻の民に立し我契約を廢せんとてなりき　一一　是はその日に廢せられたり是においてかの我に聽したがひし憫然なる羊は之をヱホバの言なりしと知れり　一二　我彼らに向ひて汝等もし善と視なば我價を我に授けよ若しからずば止めよと言ければ彼等すなはち銀三十を權りて我價とせり　一三　ヱホバ我に言たまひけるは彼等に我が估價せられしその善價を陶人に投あたへよと我すなはち銀三十を取てヱホバの室に投いれて陶人に歸せしむ　一四　我また結といふ杖を折れり是ユダとイスラエルの間の和好を絶んとてなりき　一五　ヱホバ我に言たまはく汝また愚なる牧者の器を取れ　一六　視よ我地に一人の牧者を興さん彼は亡ぶる者を顧みず迷へる者を尋ねず傷つける者を醫さず健剛なる者を飼はず肥たる者の肉を食ひ且その蹄を裂ん　一七　其羊の群を棄る惡き牧者は禍なるかな劍その腕に臨みその右の目に臨まん其腕は全く枯へその右の目は全く盲れん

第一二章

一　イスラエルにかゝはるヱホバの言詞の重負　ヱホバ即ち天を舒べ地の基を置る人のうちの靈魂を造る者言たまふ　二　視よ我ヱルサレムを

三 してその周圍の國民を蹌蹌はする杯とならしむべしエルサレムの攻圍まるゝ時是はユダにも及ばん　三 其日には
我ヱルサレムをして諸の國民に對ひて重石とならしむべし之を持擧る者は大傷を受んイ 地上の諸國みな集りて之に
四 攻寄べし　四 ヱホバ言たまふ當日には我一切ロ の馬を擊て駭かせその騎手を擊て狂はせん而して我ユダの家の上に
五 我目を開き諸ハ の國民の馬を擊て盲になすべし　五 ユダの牧伯等その心の中に謂んヱルサレムの居民はその神
六 萬軍のヱホバに由て我力となるべしと　六 當日には我ユダの牧伯等をして薪の下にある火盤ホのごとく麥束の下に
ある炬火ヘのごとくならしむべし彼等は右左にむかひその周圍の國民を盡く焚んヱルサレム人はなほヱルサレム
七 にてその本の處に居ことを得べし　七 ヱホバまづユダの幕屋を救ひたまはん是ダビデの家の榮およびヱルサレム
八 の居民の榮のユダに勝ること無らんためなり　八 當日ヱホバ、ヱルサレムの居民を護りたまはん彼らの中の弱き
九 者もその日にはダビデのごとくなるべしまたダビデの家は神のごとく彼らに先だつヱホバの使のごとくなるべし
九 その日には我ヱルサレムに攻きたる國民をことごとく滅すことを務むべし
一〇 一〇 我ダビデの家チおよびヱルサレムの居民に恩惠と祈禱の靈をそゝがん彼等はその刺たりし我を仰ぎ觀獨子ヌの
一一 ために哭くがごとく之がために哭き長子のために悲しむがごとく之がために痛く悲しまん　一一 その日にはヱルサ
一二 レムに大なる哀哭あらん是はメギドンの谷なるハダリンモンに在し哀哭のごとくなるべし　一二 國中の族おのお
一三 の別れ居て哀哭べし即ちダビデの家の族別れ居て哀哭きその妻等別れ居て哀哭きナタンの家の族別れ居て哀哭きそ
一三 の妻等別れ居て哀哭かん　一三 レビの家の族別れ居て哀哭きシメイの族別れ居て哀哭きそ
一四 の妻等わかれ居て哀哭かん　一四 その他の族も凡て然りすなはち族おのおの別れ居て哀哭きその妻等別れ居て哀哭

イ 撒五一・一七、二二、二三　ロ 亞一一・四、六、八、九、一四・四、六、八、一三　ハ 太二一・四四、二詩七六・六　結三八・四　ニ 阿一八　ホ 耳三・一六　ヘ 耳三・一〇　ト 耳三・一〇　チ 基二・二二　亞一二・三　リ 耶三一・九、五〇・四　ヌ 約一九・三四、三七　結三九・二九、二八　耳二・一三　ル 耶六・二六　默一・七　ヲ 徒二・三七　ワ 王下二三・二九　カ 代下三五・二四　ヨ 默八・一〇

カ太二四・三〇 默一・七 レ來九・一四 彼前一・一七 米五・一二、ナ米三・六、七
ヨ母後五・一四 路三・三一 ソ出二三・一三 書二三・七 詩一六・四 結三〇・一三 何二 ツ彼後二・一 ネ申一三・六、八、一八 ム歴七・一四 ウ賽四〇・一一 結
タ亞一二・三 ラ王下一・八 賽二〇・二一 太三・四 ノ太二六・三一 可 ヤ賽四八・一〇 マ彼前一・六、七
三四・二三 牛約一〇・三〇、一四・一〇、一一 腓二・六 ク羅一一・五 オ太一八・一〇、一四 路一二・三二 ケ詩五〇・一五、九一・一五 亞一〇・六 コ賽一三・九 耳二・三一 徒二・二〇
太二六・三一 可 ヤ賽四八・一〇 マ彼前一・六、七 フ詩一四四・一五 耶三〇・二二 結一一・二〇 何二・二三 エ耳三・二 テ賽一三・一六 亞八・八

くべし

第一三章

一 その日罪と汚穢を清むる一の泉ダビデの家とヱルサレムの居民のために開くべし　二 萬軍のヱホバ言たまふ其日には我地より偶像の名を絶のぞき重て人に記憶らるゝことと無らしむべし我また預言者および汚穢の靈を地より去しむべし　三 人もしなほ預言することあらば其生の父母これに言ん汝は生べからず汝はヱホバの名をもて虚偽を語るなりと而してその生の父母これが預言しをるを刺ん　四 その日には預言者ども預言するに方りてその異象を羞ん重て人を欺かんために毛衣を纏はじ　五 彼言ん我は預言者にあらず地を耕へす者なり即ち我は若き時より人に買れたりと　六 若これに向ひて然らば汝の兩手の間の傷は何ぞやと言あらば是は我が愛する者の家にて受たる傷なりと答へん

七 萬軍のヱホバ言たまふ劍よ起て我牧者わが伴侶なる人を攻よ牧者を擊て然らばその羊散らん我また我手を小き者等の上に伸べし　八 ヱホバ言たまふ全地の人二分は絶れて死に三分の一はその中に遺らん　九 我その三分の一を携へて火にいれ銀を熬分るごとくに之を熬分け金を試むるごとくに之を試むべし彼らわが名を呼ん我これにこたへん我これは我民なりと言ん彼等またヱホバは我神なりと言ん

第一四章

一 視よヱホバの日來る汝の貨財奪はれて汝の中にて分たるべし　二 我萬國の民を集めてヱルサレムを攻擊しめん邑は取られ家は掠められ婦女は犯され邑の人の半は擄へられてゆかん然どその餘の民は邑より絶れじ　三 その時ヱホバ出きたりて其等の國人を攻擊たまはん在昔その軍陣の日に戰ひたまひしごとく

四　なるべし　四　其日にはエルサレムの前に當りて東にあるところの橄欖山の上に彼の足立たん而して橄欖山その
五　眞中より西東に裂て甚だ大なる谷を成しその山の半は北に半は南に移るべし　五　汝らは我山の谷に逃いらん其山
の谷はアザルにまで及ぶべし汝らはユダの王ウジヤの世に地震を避て逃しごとくに逃んハ我神ヨホバ來りたまはん
六　諸の聖者なんぢとともなるべし　六　その日には光明なかるべく輝く者消うすべし
七　ホバこれを知たまふ是は晝にもあらず夜にもあらず夕暮の頃に明くなるべし　七　茲に只一の日あるべしヨ
八　出でその半は東の海にその半は西の海に流れん夏も冬も然あるべし　八　その日に活る水エルサレムより
九　九　ヨホバ全地の王となりたまはん其日には只ヨホバのみ只その御名のみにならん　一〇　全地はアラバのごとく
一〇　なりてゲバよりエルサレムの南のリンモンまでの間のごとくなるべし而してエルサレムは高くなりてその故の處
に立ちベニヤミンの門より第一の門の處に及び隅の門にいたりハナニエルの戍樓より王の酒榨倉までに渉るべし
一一　ニ　その中には人住んで呪詛あらじヨルサレムは安然に立べし
一二　三　ヨルサレムを攻撃し諸の民にヨホバ災禍を降してこれを擊なやましたまふこと是のごとくなるべし即ち
一三　彼らその足にて立をる中に肉腐れ目その孔の中にて腐れ舌その口の中にて腐れん　一三　その日にはヨホバかれらを
一四　して大に狼狽しめたまはん彼らは各々人の手を執へん此手と彼手擊あふべし　一四　ユダもまたヨルサレムに於て戰
一五　ふべしその四周の一切の國人の財寶金銀衣服など甚だ多く聚められん　一五　また馬騾駱駝驢馬およびその諸營の
一切の家畜の蒙る災禍もこの災禍のごとくなるべし

イ 結一一・二三　ロ 耳三・一二、一四　ハ 啓一・一　ニ 太一六・二七、二四・三〇、三一、二五・　ホ 耳三・一一　ヘ 默二二・五　ト 太二四・三六　チ 箴三〇・二六、六〇　リ 結四七・一　一八　默二二・一　ヌ 耳二・二〇　ル 但二・四四　默二二・一五　ヲ 弗四・五、六　ワ 箴四〇・四　カ 亞一二・六　ヨ 尼三・一、一二・三九　耶三一・三八　タ 耶三一・四〇　レ 耶二三・六　ソ 撒前一四・一五、　ツ 士七・二二　二〇・二三　代下二一・二　結三八・二一　ネ 結三九・一〇、一七　ナ 亞一四・一二

ラ 賽六〇・六、七、九、六六・二三　ム 利二三・三四、四三　ウ 賽六〇・一二　尼八・一四　何一二・九　約七・二　ヰ 申一一・一〇　ノ 賽二三・一八　オ 弗二・一九、二〇、　ク 賽三五・八　耳三・一七　默二一・二七、二一、二三

一六　エルサレムに攻きたりし諸の國人の遺れる者はみな歳々に上りきてその王なる萬軍のヱホバを拜み結茅の節を守るにいたるべし　一七　地上の諸族の中その王なる萬軍のヱホバを拜みにエルサレムに上らざる者の上には凡て雨ふらざるべし　一八　例ばエジプトの族もし上り來らざる時はその上に雨ふらじヱホバその結茅の節を守りに上らざる一切の國人を擊なやまし災禍を之に降したまふべし　一九　エジプトの罪凡て結茅の節を守りに上り來らざる國人の罪是のごとくなるべし　二〇　その日には馬の鈴にまでヱホバに聖としるさん又ヱホバの室の鍋は壇の前の鉢と等しかるべし　二一　エルサレムおよびユダの鍋は都て萬軍のヱホバの聖物となるべし凡そ犧牲を獻ぐる者は來りてこれを取り其中にて祭肉を煮ん其日には萬軍のヱホバの室に最早カナン人あらざるべし

ゼカリヤ書　をはり